ヘブライ語聖書サムエル記上 18 章 6 節 *šālīšîm* は「3 弦の琴」か？ —リュート、シンバル、シストルム—

竹内　茂夫[†]

キーワード：ヘブライ語、*šālīšîm*、**šālīš*、リュート、シンバル、シストルム、3、オノマトペ

1　はじめに

ヘブライ語聖書サムエル記上 18 章 6 節に現れる *šālīšîm* は、「ヘブライ語で一番論争のまとになってきた音楽語」(ザックス 1965: 114。Braun 2002: 41 も) と言われている語である。*šālīšîm* はヘブライ語聖書にただ 1 回のみ現れる語 (hapax legomenon) で、単数形では聖書本文には現れない**šālīš* の複数形とされている。

この語は、いくつかの邦訳聖書では「三絃の琴」(岩波書店訳 [2005])、「三絃琴」(聖書協会共同訳 [2018]、新共同訳 [1987])、「三糸の琴」(口語訳 [1955])、「三弦の琴」(新改訳 2017、第 3 版 [2003]、第 2 版 [1978]) のように撥弦楽器のように訳されている。一方で、それ以前の文語訳 (『明治元訳聖書』[1887]) では、「磬 (けい、きん)」のように体鳴楽器 (膜のない打楽器) として訳されていた。

本稿では、この *šālīšîm* について、ヘブライ語聖書の古代訳、古代西アジアでの考古学的証拠などから再検討したい。以下では、邦訳聖書の数種類の訳語を「3 弦の琴」として代表させる。なお、邦訳聖書では「琴」と訳さ

[†]京都産業大学文化学部

れているが、少なくとも日本でよく見られるような床に置いて爪弾く横長の撥弦楽器ではない[1]ことには注意されたい。

2 サムエル記上 18 章 6 節の本文

2.1 ヘブライ語マソラ本文

この語が登場するサムエル記上 18 章 6 節後半のマソラ本文と呼ばれるヘブライ語テキストのローマ字転写は、次の通りである。ローマ字転写の方式は Lambdin (1971) に従う。*šālīšîm* に関しては、異読などの本文批評上の問題はない。

(1) *wat-tēṣē(')nā(h)* *han-nāšîm* *mik-kol* *'ārê* *yiśrā'ēl* *lā-šîr*[2]
&-they.F[3].went out the-women from-all of cities of Israel to-sing
wə-ham-məḥōlôṯ *li-qrā(')ṯ* *šā'ûl* *ham-melek̲*
&-the-dancers.F to-meet Saul the-king
bə-ṯuppîm *bə-śimḥā(h)* *û-b̲ə-šālīšîm* (サムエル上 18: 6)
with-tambours with-joy &-with-"šālīšîm"
「そして女たちはイスラエルの全都市から歌うために出てきた、
そして踊る女たちは王であるサウルを出迎えるために、
タンバリンと『シャーリーシーム』で喜ばしく。」(私訳)

šālīšîm の前に、楽器として *tōp*「タンバリン、フレームドラム」の複数形 *tuppîm* が現れていることもあり、この *šālīšîm* も楽器の複数形と考えられている[4]。

---

[1] さらに、日本語で「琴」という語で示されている楽器は、一般には箏 (「箏 (そう) の琴」) に属する楽器である。箏は可動式の支柱 (「柱」[じ]) で弦の音程を調節するのに対し、琴 (「琴 (きん) の琴」) は柱が無くて弦を押さえる場所で音程が決められる。

[2] この語は、書かれている形 (ケティヴ) として *lā-šiwr* "?" に対して、読むべき音 (ケレ) として子音のみ *lšyr* が欄外に書かれており、それに従って *lā-šîr* "to-sing.INF.CSTR" とした。続く *ham-məḥōlôṯ* "the-dancers.F" は Tsumura (2007: 476) の解釈に従った。

[3] 語注での略語は次の通りである。ACT: active, DAT: dative, F feminine, INF. CSTR: infinitive construct, M: masculine, NOM: nominative, PL: plural, PRES: present, PTC: participle, SG: singular, VOC: vocative

[4] その間に現れる *bə-śimḥā(h)*は、邦訳聖書での「歓声」(岩波書店訳)、「喜びの声を上げ」(［新］共同訳、口語訳)、「祝い歌」(口語訳) のように何らかの音楽的なものを表すという見

2.2 ギリシア語七十人訳

一方、ギリシア語七十人訳 (前 3 世紀以降) では、この語はシンバルと訳されている。

(2) *ἐν τυμπάνοις καὶ ἐν χαρμοσύνῃ καὶ ἐν κυμβάλοις*
in drum.PL.DAT & in delight.SG.DAT & in cymbal.PL.DAT

ギリシア語七十人訳では、シンバル *κύμβαλον* は 16 回[5]登場し、この箇所にも現れている。他方で、ヘブライ語聖書では、シンバルを表す語は 2 種類登場し[6]、**məṣēleṯ* (ただし双数形 *məṣiltáyim* のみで現れる) が 13 回[7]、**ṣilṣāl* (ただし複数形 *ṣelṣəlîm* のみで現れる) が 3 回[8]現れる。

シンバルは、図像学的にも古代オリエントでは前三千年紀から見られ、イスラエルにおいては楽器および図像史料として、青銅器時代 (18 点)、鉄器時代 (4 点)、ペルシア時代には見られないが、ヘレニズム時代 (26 点) まで計 48 点が見られるとのことである (Braun 2002: xxix-xxxi)。

2.3 ラテン語ウルガータ

後代 (後 4 世紀後半) ではあるけれども、ヘブライ語聖書の本文批評で

解もあるが、ヘブライ語聖書の他の箇所では見られない用法である。他方、これが一般的によく現れる「喜んで」という意味で、前後の *bə-ṯuppîm* “with-tambours” および *ḇə-šālīšîm* “with-‘šālīšîm’”を全体的に修飾しているという見解もあり (Tsumura 2007: 477)、「喜びつつ」(新改訳 2017 と第 3 版) と訳されている邦訳聖書もある。

[5] サムエル上 18: 6、サムエル下 6: 5、歴代誌上 13: 8、15: 16、19、28、16: 5、42、25: 1、6、歴代誌下 5: 12、13、29: 25、エズラ 3: 10、詩篇 150: 5 (2 回)。他に外典の 1 エスドラス 5: 57、ユディト 16: 1、1 マカバイ 4: 54、13: 51 に現れる。ネヘミヤ 12: 27 にはこの語ではなく *κυμβαλίζοντες* “those who are playing cymbals PRES.PTC.ACT.M.NOM/VOC.PL” が現れる。

[6] この 2 種類のシンバルの違いに関して、かつて次のように総括した。「メツィルタイムとツェルツェリームの違いに関して、サムエル記と詩篇に現れるツェルツェリームがより古く、エズラ記、ネヘミヤ記、歴代誌に現れるメツィルタイムがより新しいとする意見がある。しかしながら、より古いウガリト (前 14-13 世紀) にはメツィルタイムにあたる *mṣltm* が現れる一方で、より新しいミシュナ・ヘブル語 (後 2 世紀) にはツェルツェリームにあたる *ṣlṣl* が見られるので、それほど単純に結論づけることはできない」(竹内 2012: 70)。

[7] 歴代誌上 13: 8、15: 16、19、28、16: 5、42、25: 1、6、歴代誌下 5: 12、13、29: 25、エズラ 3: 10、ネヘミヤ 12: 27。

[8] サムエル下 6: 5、詩篇 150: 5 (2 回)。

よく用いられるラテン語ウルガータでは、シストルムと訳されている。

(3) *in tympanis* *lætitiæ,* *et in sistris*
in drum.PL.DAT joy.SG.DAT & in sistrum.PL.DAT

シストルムは、ラテン語ウルガータでは 2 回[9]登場する。古代エジプトでは楽器であるとともに祭具でもあり、ハトホル神をかたどっているものも多い。2 種類が区別され、1 つは「ナオス (堂) 型シストルム」(*sššt* ＝「セシェシェト」) という古王国 (第 6 王朝) から見られるファイアンス製のもので、もう 1 つは (*sḫm* ＝「セケム」) という金属製の弓型シストルムで中王国時代の文書に見られるが図像資料に現れるのは新王国時代ということである (マニケ 1996: 116)。どちらも柄のついた枠に数本の横棒を緩く通し、さらに小さなシンバルを付けるなどをして振って音を出す体鳴楽器である。

イスラエル近隣での考古学的証拠として、セラービート・エル＝ハーディム (シナイ半島) の神殿の壁画に描かれたシストルム (第 19-20 王朝 [前 1292〜1189、1189〜1077]、Braun 2002: 89) およびベテル出土の骨製のシストルムの柄 (前 1200 年頃、Braun 2002: 88-90) のようにイスラエル王国時代以前のものが見られるのみである。

3 「3 弦の琴」の問題点

ギリシア語七十人訳やラテン語ウルガータがシンバルやシストルムのように体鳴楽器を表す語で訳しているのに対して、日本語訳では「三絃の琴」(岩波書店訳)、「三絃琴」(［新］共同訳)、「三糸の琴」(口語訳)、「三弦の琴」(新改訳) のように 3 弦の弦鳴楽器 (弦楽器) と訳している背景は何だろうか。

[9] 諸王 1 (1 サムエル) 18: 6、諸王 2 (2 サムエル) 6: 5。

3.1 *š-l-š*=「3」？

šālīšîm は、ヘブライ語の 3 子音語根としては *š-l-š* と見なすことができる。これと同じ語根と分析できる語が *šālôš*「3」であることから、3 と何らかの関係がある音楽用語として解釈されることがある。

Braun はこの語について、3 本の弦を持つリュート、3 つの棒を持つシストルム、トライアングル、3 つの部分からなる拍子木、三角形のハープ、3 人のダンスなどの可能性を挙げている。このうち、リュートが最もあり得るとして、シュメール語の *sa.eš* がヘブライ語の *šālôš*「3」と関連があり、*šālīšîm* がリュートを表す第一候補としている (Braun 2002: 41-42)。リュートは、アラビア語の「アル・ウード *al-ʻūd* "the wood"」が語源であるとされ、日本であれば三味線や三線のように棹があって弦が数本張られている撥弦楽器である[10]。邦訳聖書の多くはそれを踏まえているように思われる。

Burgh はこの語が "additional musical instruments" または "three-stringed musical instrument[11]" と訳されることがあることからか、ラテン語ウルガーガのシストルム、トライアングルの可能性の他に、リュートが加えられるかもしれないとする (Burgh 2006: 99)。

Tsumura はサムエル記上の注解書において "The term lutes (šālīšîm)" として "Both lutes and sistrums are three-stringed instruments" と記している。その典拠として "McCarter says the name is similar to '*šalaštu*', a Mesopotamian lute-like instrument" としながらも "this word is listed neither in CAD nor in AHw" とも記している (Tsumura 2007: 476-7)。

また、Braun が言及する *sa.eš* は、オンラインの *ePSD* (The Pennsylvania Sumerian Dictionary) によれば、*eš* は "three; triplets" とあるものの、*sa.eš* は "a type of musical instrument" としか記されていない。

---

[10] 西洋音楽で「リュート」というと、一般的には洋梨を半分に切ったような大き目の本体を持ち、ルネサンス期の 6 対の複弦 (実際には最高音だけは単弦のことが多いので計 11 本) からバロック期の最大 14 対の複弦 (計 27 本) を指弾きする撥弦楽器を指し、古代オリエントのそれとはかなり異なる。

古代オリエントの「リュート」は、むしろ日本の三味線や三線のように、小さ目の本体に数本の単弦を張ってそれをばち (プレクトラム) で弾く撥弦楽器に近い。

[11] Klein の注解書では "lyres" と訳され、"some kind of three-stringed instrument" と説明されている (Klein 1983: 188)。バル・コクバが鋳造した硬貨 (後 132-5) では 3 弦のリラが刻印されている。

3.2 リュート属の考古学的証拠

このリュート属の楽器の考古学的証拠として、メソポタミアにおいてはアッカド／新シュメール／古バビロニア期 (前 2330-1600 年頃) に 8 点、中期アッシリア期 (前 1400-1200 年頃) に 5 点、新アッシリア／新バビロニア期 (前 900-539 年頃) に 1 点 (ラシード 1985: 92 を元にした Mitchell1992: 124 の表による)、セレウコス朝時代 (前 312〜140 頃) に少なくとも 9 点 (ラシード 1985: 144-7) 発見されている。また、前 2 千年紀のキプロスとアナトリアに 1 点ずつ、前 9-6 世紀のシリアに 4 点見られる (Mitchell 1992: 125)。

エジプトでは「新王国時代 (前 1580-1090) に、リュート、リラ、角形ハープ、双管、円形および方形の枠太鼓のような数多くの楽器をアジアから輸入した」(ラシード 1985: 102。ヒックマン 1986: 15 およびマニケ 1996: 89-92 も参照) と言われるように新しい楽器で、末期王朝 (前 750 頃-前 305 頃) までの絵画に描かれている。しかしながら、弦の数は 3 弦 (ヒックマン 1986: 130-1 図版 100「ハルモシス・リュート」[ハトシェプスト女王の時代 (前 1520- 1484)]) とは限らず、2 弦 (ヒックマン 1986: 32-33 図版 9 [第 19 王朝]、p.132-3 図版 101，102 [新王国時代]。p.28-9 図版 7 [第 18 王朝] も？) や 4 弦 (マニケ 1996: 103, p.193 図 75 [プトレマイオス朝時代]) のリュートと見なされる絵がある。

イスラエルでは 5 点発見されているが、王国時代以前の青銅器時代 (前 3200-1200) に 3 点、ヘレニズム時代以降 (前 332-後 324) に 2 点見られるのみで、王国時代からペルシャ時代には見られない (Braun 2002: xxix-xxxi。p.80 も参照)。このうち、ベト＝シェアン出土のかぶり物 (冠？) を載せて、首、手、足に飾りを付けた裸の女性リュート奏者 (青銅、前 13-12 世紀、Braun 2002: 84) のリュートは、1931 年に撮影された写真ではネックがあってその上に弦が 2 本張られていたように見えたのが、1944 年の写真ではなくなっているとのことである。イスラエル王国時代にリュートの考古学的な証拠がないことについて、Mitchell は “There is no clear biblical evidence for the use of the other instruments, the lute […]” とする一方で、“their absence from the Old Testament is a chance of the record”と述べている (Mitchell 1992: 133)。

3.3 *šālīšîm* の形態上の問題[12]

šālīšîm は、ヘブライ語聖書では他に現れない**šālīš* の複数形と言われているが、形態上の問題がある。この点に関して、管見ながら先行研究には指摘がなされていないようである。もし単数形**šālīš* に基づく複数形であるならば *šālīšîm* ではなくて、アクセントが語末に移動することによって「アクセント前々開音節『長』母音の弱化」(Lambdin 1971: xix-xx /§5) が起こって**šəlīšîm* となることが期待されるが、そうではない。また、聖書ヘブライ語を含むカナン諸語においては、「長」母音**ā* が**ō* になる「カナン・シフト」が起こるはずだが (例えば*'ānōḵî* ＜ **anāku*「私」)、それも起こっていない。

一方で、*šālīšîm* と同音異義語である「補佐官、侍従」は、単数形が *šālīš*[13] であるにもかかわらず複数形が *šālīšîm*[14] であり (複数形では *ā* と読ませるための記号「メテグ」が付いている)、「アクセント前々開音節『長』母音の弱化」も「カナン・シフト」も起こっていない。ヒッタイト語、エジプト語、アッカド語からの借用語という指摘が記されているがいずれも否定されており[15]、ヘブライ語内での独自の発達かもしれないことが記されている。

問題の *šālīšîm* も語形が特異なことから、全体として借用語なのではないかという可能性がある。しかしながら、その前に *ṯuppîm*「タンバリン (複数)」という楽器を表す語の複数形があるので、*šālīšîm* も複数形と想定すれば、ヘブライ語聖書において他には登場しない**šālīš* に複数形語尾が付いたものの、「補佐官、侍従」の複数形と同様に、母音弱化も「カナン・シフト」も起こらなかった独自の発達だったのかもしれない。以上のことから、「3」および「3 弦のリュート」との関わりはなお一層想定されにくいと言えるだろう。

---

[12] この点について、査読者から指摘を頂いた。

[13] サムエル記下 23: 8 (接尾辞付き)、列王記下 7: 2、17、19、9: 25 (接尾辞付き。ただし編集者「マソラ」による提案)、列王記下 15: 25 (接尾辞付き)。なお、接尾辞が付いてアクセントが語末に移動しても、アクセント前々開音節「長」母音の弱化は起こっていない。

[14] 出エジプト 14: 7、15: 4 (接尾辞付き)、列王記上 9: 22 (接尾辞付き)、列王記下 10: 25 (2 回)、エゼキエル 23: 15、23: 23、歴代誌下 8: 9 (接尾辞付き)。

[15] *HALOT* 1526。Gesenius の辞書の第 18 版 (2013: 1365) でも「参照」に留めている。

3.4 *š-l-š*＝擬音？

考古学的なリュートの証拠において、弦の数が必ずしも 3 本とは限らないこともあり、*šālīšîm* は「3」とは無関係だという意見も根強い。Montagu は “it seems much more probable that *shalishīm* has no connexion with three” (Montagu 2002: 51) と述べている。近著の Smith では、リュートの箇所には言及がまったくない (Smith 2021: 89-91/§4.3.2)。

語根の 3 子音 *š-l-š* が「3」ではなく、シャラシャラ鳴る何らかの体鳴楽器の音を示していた可能性から、擬音語ではないかとする見解がある。

ユダヤ音楽に詳しい水野はこの語について、「『三絃の琴』と訳されているのは、明らかにあやまりで、このもとのヘブライ語「シャリシーム」は打楽器である」(水野 1997: 47) と断言し、さらに、「現代イスラエルの音楽学者、故バティア・バイエル博士によれば[…]ウガリット文字を手がかりに推察すると、この語に『三』の意味を当てるのは適切ではなく、したがって、それはシンバルまたは金属のおわんで、女性によって演奏された体鳴楽器ととるのが妥当だという」(水野 1997: 76) と述べている。

3.4.1 シンバル？

擬音語に由来すると仮定した場合、前 3 世紀以降のギリシア語七十人訳のような体鳴楽器であるシンバルの可能性が考えられるだろう。その他に、シリア語訳ペシッタ (後 2 世紀)、アラム語訳であるタルグム・ヨナタン (後 2 世紀) でもシンバルと訳されている。一方で、近年の英訳聖書では New Living Translation (1996, 2004, 2015) でしか見つけることができなかった (ギリシア語七十人訳やシリア語ペシッタからの英訳を除く)。

七十人訳などから *šālīšîm* をシンバルと解釈する可能性があるとはいえ、いずれもかなり後代の翻訳であるという難点がある。シンバルであれば、なぜ他でも使われている *məṣiltáyim* や *ṣelṣəlîm* ではないのかという疑問が残る[16]。

---

[16] ギリシア語七十人訳がヘブライ語マソラ本文とは異なるヘブライ語底本を元にしており (秦 2019: 334-6、352、357、366-9)、そこでは *məṣiltáyim* あるいは *ṣelṣəlîm* だったのかもしれないという推測は可能である。

3.4.2 シストルム？

もう 1 つの擬音語としての可能性は、後 4 世紀のラテン語ウルガータに見られるようなシストルムという体鳴楽器である。Montagu は上述のように「3」との関連を否定し、イスラエルでのシストルムの証拠がないとしながらも、“the word is onomatopoeic, meaning something which goes *shlshlsh*, and this again might suggest some form of rattle.” (Montagu 2002: 51) の可能性を示唆している。Kolyada は Weiss (1895) の提案に従い、シストルムとする (Kolyada 2009: 40)。Smith は Kolyada を踏まえて“This reflects the present consensus”と述べ、エジプト語の *sesheshet*[17]との関連を挙げて、やはりオノマトペの可能性を記している (Smith 2021: 117)。

ヘブライ語聖書において、シストルムが言語的に明示されていない理由として考えられるのは、エジプトにおいて「シストルムをもつということはもとはハトホル信仰をあらわす行為だったのだが、やがてシストルムそのものに生命とか崇拝とのシンボルとしての、もっと普遍的な意味が加わっていった」(マニケ 1996: 117) と言われているように、楽器である以上にヤハウェ信仰とは異なる異教への信仰を表す祭具であるために、直接の言及が避けられたのかもしれない。

シストルムは体鳴楽器としてシャラシャラなる小さなシンバルまたはガチャガチャ鳴る棒を持っているが、Tsumura も述べているようにその棒が 3 本の場合もあるので、擬音ということと「3」と両方の要素を持っているとも言える[18]。

一方で、*šālīšîm* をシストルムと見なす難点としては、ラテン語ウルガータがかなり後代であることと、上述のようにイスラエルでの考古学的な証拠が乏しく、王国時代には見られないことである。しかしながら、リュートも王国時代のイスラエルにおいて考古学的証拠がないという点では同様である。

---

[17] エジプト語は母音を示さないので、本来は *sššt* (マニケ 1996: 116) であろう。

[18] 擬音語だとすれば、*šālīšîm* の単数形として想定されている単数形**šālīš* に複数語尾-*îm* が付いてもそのまま変化しなかったと考えられ、「アクセント前々開音節『長』母音の弱化」がなく、「長」母音**ā* が**ō* になる「カナン・シフト」がないことも説明できると思われるが、詳細については今後の研究課題としたい。

5 おわりに

本稿では、ヘブライ語聖書のサムエル記上 18 章 6 節にただ 1 度だけ現れ「ヘブライ語で一番論争のまとになってきた音楽語」(ザックス 1965: 114) と言われてきた *šālīšîm* (**šālīš* の複数形とされるが、通常の語形変化ではない) の問題点について論じた。

この語は、邦訳聖書では「三絃の琴」(岩波書店訳)、「三絃琴」(［新］共同訳)、「三糸の琴」(口語訳)、「三弦の琴」(新改訳) のように弦鳴楽器のうち撥弦楽器として訳されている一方で、文語訳では「磬 (けい、きん)」のように体鳴楽器 (打楽器) として訳されている。

邦訳聖書のように、棹に 3 本の弦を張った撥弦楽器のリュートと解釈する意見がある (Braun 2002: 41-42、Tsumura 2017: 476-7)。それは「3」と子音語根が同じ *š-l-š* ということに基づき、シュメール語やアッカド語を証拠とする。

しかしながら、考古学的に発掘されまた絵画で描かれているリュートの弦の数は 3 本とは限らず 2 本や 4 本の楽器もあるので、「3」と同じ語根があるが故に、3 にちなむ何らかの音楽に関わる用語、中でも三味線や三線などの 3 弦の撥弦楽器すなわち 3 弦のリュートとみなすのは早計であろう。とはいえ、リュート属の楽器はイスラエル王国時代より前と後に考古学的な証拠があるので、王国時代にはなかったということではなく、Mitchell の言うようにたまたま言及されていないのか、あったとしても別の用語で言われているということであろう。

またこの語は、古代訳であるギリシア語七十人訳 (前 3 世紀以降) では *κυμβάλοις*「シンバル (複数与格) 」のように、体鳴楽器として訳されている。しかしながら、シンバルは *məṣiltáyim* や *ṣelṣəlîm* という語があるにも関わらずこの語が用いられている理由がヘブライ語からは説明できない。

一方で、ラテン語ウルガータ (後 4 世紀後半) では *sistris*「シストルム (複数与格) 」という体鳴楽器で訳されている。シストルムはリュートと同じくイスラエルの王国時代の考古学的証拠がないものの、エジプト語の名称である *sššt* と同じく擬音語の要素があることと、3 つの小シンバルや棒を持つものもあることから、水野 (1997) や Smith (2021) のようには断言

できないにしても、*šālīšîm* の候補として現時点で最も可能性が高いのではないだろうか。

【参照文献】

Braun, Joachim (2002) *Music in ancient Israel / Palestine: Archaeological, written, and comparative sources*. Translated by D. W. Stott. The Bible in its world. Grand Rapids, Michigan: W. B. Eerdmans.

Burgh, Theodore W. (2006) *Listening to the artifacts: Music culture in ancient Palestine*. New York, London: T & T Clark.

ePSD = The Pennsylvania Sumerian dictionary. http://psd.museum.upenn.edu/nepsd-frame.html.

Gesenius, W. (2013) *Hebräisches und aramäisches Handwörterbuch über das Alte Testament.* 18. Aufl. Gesamtaufgabe. Berlin, Heidelberg: Springer-Verlag.

HALOT = Koehler, L. and W. Baumgartner (2001) *The Hebrew and Aramaic lexicon of the Old Testament*. Study edition. Translated by M. E. J. Richardson. Leiden, Boston, Köln: Brill.

ヒックマン、ハンス (1986)『エジプト』人間と音楽の歴史 第 II シリーズ : 古代音楽・第 1 巻. 音楽之友社

秦剛平 (2019) 『七十人訳ギリシア語聖書　サムエル記』青土社

岩波書店訳 ＝ 旧約聖書翻訳委員会 (訳) (2005)『旧約聖書 II : 歴史書』岩波書店

Klein, Ralph W. (1983) *1 Samuel*. Word Bible commentary, 10. Waco, Texas: Word Books.

Kolyada, Yelena (2014) *A Compendium of musical instruments and instrumental terminology in the* Bible. Translated from Russian by the author with the assistance of David J. Clark. Bible World. London, New York: Routledge.

Lambdin, Thomas O. (1971) *Introduction to Biblical Hebrew*. London: Darton, Longman and Todd.

マニケ、リーサ (1996)『古代エジプトの音楽』弥呂久

Mitchell, T. C. (1992) 'The music of the Old Testament reconsidered'. *Palestine Exploration Quarterly* 1992 July-September: 124-143.

水野信男 (1997) 『ユダヤ音楽の歴史と現代』アカデミア・ミュージック

Montagu, Jeremy (2002) *Musical instruments of the Bible*. Lanham, Md., & London: Scarecrow Press.

ラシード、スービ・アンワル (1985)『メソポタミア』人間と音楽の歴史　第 II シリーズ：古代音楽・第 2 巻、音楽之友社

ザックス、クルト (1965)『楽器の歴史 上』全音楽譜出版 (Sachs, Curt [1940] *History of musical instruments*. New York: W. W. Norton & Company.)

Smith, John Arthur (2021), *Music in religious cults of the Ancient Near East*. Routledge Research in Music. London and New York: Routledge.

竹内茂夫 (2012)「旧約聖書に現れる楽器」『宣教と神学』34: 69-82

Tsumura, David Toshio (2007) *The First Book of Samuel*. The new international commentary on the Old Testament. Grand Rapids, Michigan / Cambridge: William B. Eerdmans.

Weiss, Johann (1895) *Die musikalischen Instrumente in den heiligen Schriften des Alten Testamentes*. Graz: Leuschner & Lubensky.

Is *šālīšîm* (1 Samuel 18: 6) in the Hebrew Bible the three-stringed musical instrument?

Lutes, cymbals or sistrums

Shigeo TAKEUCHI

The Biblical Hebrew word *šālīšîm* (the so-called "plural" form of **šālīš*, though irregular one, without the propretonic reduction and without the "Canaanite shift") which appears only in 1 Samuel 18: 6, has been said as "the most disputed musical word of the Hebrew language" (Sachs 1940). In recent Japanese translations of the Bible, this word has been translated as "three-stringed zither" (3 弦の琴), while in "the Meiji era Original Translation" (1887) it is translated as "kei" (磬), an idiophone (percussion instruments except drums).

Some scholars interpret it as a "three-stringed lute," a plucked instrument with three strings on the neck (Braun 2002, Tsumura 2017), based on the fact that the consonant root is the same, *š-l-š*, as the "three" and the evidence would come from Sumerian and Akkadian languages.

However, since the number of strings on lutes excavated archaeologically and depicted in paintings is not always three, and some instruments have two or four, it would be premature to assume that the presence of the same root as the word "three" indicates some kind of musical term associated with "three", especially a three-stringed plucked instrument such as the shamisen or sanshin, i.e. a Japanese (Okinawan) three-stringed lute. However, since there is archaeological evidence of instruments of the genus lute both before and after the time of the Kingdom of Israel (ca.1000-586 BCE), this does not mean that they did not exist during the Kingdom, but that they are either not mentioned by chance, as Mitchell (1992) suggests, or that they are referred to by a different term if they did exist.

Moreover, the word is translated as an idiophone in the Greek Septuagint (from the third century BCE onwards), as in *κυμβάλοις* "cymbal (plural dative)," even though cymbals are referred as *məṣiltáyim* and *ṣelṣəlîm* elsewhere in the Hebrew Bible. On the other hand, the Latin Vulgate (late 4th century CE) translates it as *sistris* "sistrum (plural dative)", an idiophone used commonly in Ancient Egypt. Although the sistrum, like the lute, lacks archaeological evidence from the Kingdom of Israel period, it has onomatopoeic elements, like the Egyptian name *sššt*, and some of them have three small cymbals or rods, so that, even if we cannot be as certain as Mizuno (1997) and Smith (2021), it is probably the most likely candidate for *šālīšîm*.

Faculty of Cultural Studies
Kyoto Sangyo University
Motoyama, Kamigamo, Kyoto 603-8555, Japan
E-mail: atake@cc.kyoto-su.ac.jp